

第1回

伊豆カンファレンス記録集



Excerpta Medica

伊豆カンファレンス開催にあたって



現在の医学の進歩はめざましいものとなっています。皮膚科学の進歩も同じで、皮膚科学の守備範囲も広がりつつあります。新しい知見が数多く出され、皮膚科学の考え方も大きく変遷し、医学の進歩と歩を合わせて進展しつつあります。このような状況下で、皮膚科学が医学の中のアイデンティティーを確立するためには、皮膚科学独自の展開が要求されます。皮膚免疫学は、これまでの研究手法を中心とした学問分野からとは異なり、皮膚科学領域における疑問に対する解決の仕方を考える学問分野で、あらゆる分野の研究方法を取り入れて発展できる分野です。これまで、皮膚免疫学は、皮膚科学の発展に大きく貢献してきましたし、さらに次世代の皮膚科学の発展にも貢献できる学問であると思います。皮膚免疫学は、多くの分野で、その母体である免疫学そのものに負うところが多い学問ですが、皮膚免疫学が免疫学の発展に貢献するといった側面もでてきています。ランゲルハンス細胞の研究成果がその良い例と言えましょう。21世紀を迎えるに当たって、皮膚免疫学がさらに発展するためには、その母体である免疫学に学ぶとともに、皮膚免疫学から免疫学に対して、新しい情報を発信できるようになる必要があります。その意味で、皮膚科学の若手研究者が一堂に集い、ネクタイを外して、皮膚科学のいろいろな問題を口角泡を飛ばしながら論じる場を作ることが必要です。

このようなアイデアは以前から暖めてきたものですが、なかなか実現することができませんでした。このたび、日本の皮膚免疫学の指導者である世話人、幹事の先生方、ご支援を頂ける会社の方々からのご賛同を受けることができ、伊豆カンファレンスとして、はじめての会合をもつことができました。第1回の伊豆カンファレンスでは、免疫学の世界的研究者の一人である平野俊夫先生にお願いして、細胞内シグナル伝達機構についてご教示を頂きました。続いて、会員から最新の研究データを披露していただき、長時間にわたって討論を行うことができ、実りある時間をもつことができました。

最後に、このような活動に多大のご支援を頂いたユーシービージャパン株式会社、住友製薬株式会社、第一製薬株式会社に厚く御礼を申し上げます。また、伊豆カンファレンスが益々発展することを期待いたします。

伊豆カンファレンス世話人
東京医科歯科大学医学部皮膚科学

西岡 清

第1回伊豆カンファレンスを終えて



日本における皮膚免疫・アレルギー学の発展のためにということで西岡清先生の発案で、ユーシービージャパン株式会社、住友製薬株式会社、第一製薬株式会社のご支援を得て開催された伊豆カンファレンスの第1回目が終了し、その記録集を拝見しまして、その場に居合わせて感じた興奮を改めて感じております。

約20年前に皮膚免疫学をはじめた頃には、研究者の数が少ないことは勿論のこと、参考にすべき適当な書物もごく限られたものであったことを思い出しています。また、その頃大阪で開かれた学会のあとで、片山一朗先生や横関博雄先生とともにビルの屋上のビアガーデンでビールをご馳走になりながら、西岡先生から、日本に於いて皮膚免疫学を活発化する必要性をくり返し説かれたこともなつかしい思い出となっています。伊豆カンファレンスには全国の皮膚科学教室から、皮膚免疫・アレルギー学を志す人々が集まって率直な討論がなされました。まさに今昔の感があります。そこで報告された研究の内容も充分世界に通用するものであることも、また私にとっては楽しいことでした。西岡先生とその頃お話ししていたことが現実のものになったのだという感慨があります。

第1回目は平野先生の特別講演と横関先生、佐藤先生の研究報告という内容でした。2回目以後も基本的には、このような形式で行われていくことになっています。皮膚免疫学は、免疫学の分野では中心からはずれた分野であるという感じがありました。しかし、最近の免疫学の進展は、皮膚免疫学を粘膜の免疫学とともに体表面の免疫学という観点からみることができるようになってきました。また臓器特異性という点からは皮膚免疫学が新たな概念を提示したということもできるように思っています。「特殊から普遍へ」という言葉は、私にとって、皮膚科学を勉強する際に常に念頭においていることです。西岡先生が冒頭に述べられていますように、皮膚免疫・アレルギー学から、免疫学・アレルギー学に貢献するものが続出してくることを期待したいと思えます。そしてこの伊豆カンファレンスがそのための場となることを期待したいと思えます。

伊豆カンファレンス世話人
東京大学大学院医学系研究科皮膚科学

玉置 邦彦